

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 キリスト教学			研究科	キリスト教学	専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	キリスト教学研究科・キリスト教学専攻 博士課程後期課程2年		大野剛 印			
指導教員	所属・職名		氏名			
	キリスト教学研究科		竹原創一 印			
自然・人文・社会の別	自然 ・ ○人文 ・ 社会		個人・共同の別	○個人 ・ 共同 名		
研究課題名	賀川豊彦の協同組合論－キリスト教社会経済思想を検証し、新時代の生き方を探る－					
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
研究期間	2013 年度					
研究経費	(支出金額) 198 千円 / (採択金額) 200 千円					

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究のテーマは「賀川豊彦の協同組合論－キリスト教社会経済思想を検証し新時代の生き方を探る」である。これは賀川が社会的弱者といわれる人々を宗教的かつ経済的に救済しようとした運動を解明し、それを今日の課題に反映させることを目的とする。そこで賀川のこの分野の主要論文、関連する研究論文及び賀川の活動事例を研究対象としてその解明に努めた。また最近の協同組合、教会、福祉事業の実態を理解するために、関連する学会研究会等において状況の調査、研修、研究を実践した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[奪い合いと分かち合い] [キリスト教社会経済論] [福祉社会]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 日本基督教学会における発表**

日本基督教学会(9月11日西南学院大学)では、「賀川のキリスト教社会経済論－協同組合型社会の形成を目指して」と題して発表した。要旨は以下のとおり。

(主観経済の原理) 賀川のいう主観経済論とは、経済を欲望と労働から研究する独自の議論である。それまでの経済学が物質を中心とする需要と供給の関係にもとづくのに対し、彼の経済論は人間を中心に据え、人間の意思が経済を制御すると唱えた。また「生命と創造に経済的基礎を据えねばならぬ」として経済が宗教運動に結びつくとき、個人が心身ともに救済されるばかりでなく、社会全体を改造できると訴えた。このような考え方が賀川のいうキリスト教社会経済論を表す。

(賀川の資本主義批判) 賀川は主観経済論の立場から資本主義を批判した。資本主義の構造的な欠陥は資本が集中して剰余価値が少数の資本家に独占され、大多数の労働者が相対的貧困に陥ることにあるという。また効率追求の余り人間疎外が生じること、自由はあるが行き過ぎがあることを問題とした。これに対してマルクス主義は、資本主義が労働者を賃金奴隷と捉える点は評価するが、個人の自由が制約される。結局資本主義はマルクス主義同様に人間の尊厳に配慮されていないことを指摘した。

(協同組合の仕組みと現実) 1995年ICA国際協同組合連盟は協同組合の定義、価値、原則を宣言した。価値としては自助、平等、公正、連帯、民主主義など。原則としては、組合員による民主的管理、経済的参加、自治と自立などが挙げられる。これは賀川が当初から探求してきた協同組合論に符合する。資本主義論は奪い合いの体制になるが、協同組合論は分かち合い体制であるといえる。しかしながら賀川が強調するのに対してICA宣言では触れられていないのは、キリスト教社会経済論、即ち協同組合におけるキリスト教精神の徹底に関することである。

(おわりに) 21世紀はどのような社会が期待されるのか。一例としてICA宣言に基づく協同組合型社会に賀川の唱えるキリスト教社会経済論を統合した共同体が考えられる。地域社会において市民が自発的に形成する協同組合による無駄のない消費生活、またそれを支える生産活動および福祉活動を実践する方式である。その場と人材を提供するには地域毎の教会が期待される。このようなキリスト教社会経済論による協同組合型社会は、今の行き過ぎた市場主義経済を牽制する大きな力となるだろうと思う。

研究成果の概要 つづき

2. 研究準備の概要

昨年より半年余りの期間において研究成果の発表までには至らなかったが、その準備としていくつかの活動で大きな手応えを得た。賀川学会、イエスの友研学会、社会福祉セミナー、メディカルカフェ、公共福祉研究会に参加できたこと、またとくに賀川豊彦記念松沢資料館においてボランティアとして資料整理に携わったことである。

- 1) 賀川学会(7月)においては協同組合論が取り上げられ、この研究の方向性を確認することができた。
- 2) イエスの友の会(7月)では賀川の息のかかった方々の生き方を見ることができた。彼らの謙遜にして確固たる人柄にはあらためて賀川の説く人格経済の重要性を教えられた。
- 3) 社会福祉セミナー(7月)では、障がい者と健常者が文字通り手を取り合って歩むことが双方に有益であり、社会の健全化にも有効であることを再確認した。
- 4) メディカルカフェ(4、5、6、7月)はがんの宣告を受けた人、医療従事者、ボランティアが一つのテーブルについてお茶を戴きながら雑談をするという集まりである。そこで生きるための要件を改めて考えさせられた。どんな立場の人でも平穏な生活を送るためには神の摂理を受け入れる信仰が必要であり、また家族や社会とのつながりと経済的な保証は外すことはできないということである。
- 5) 資料館ボランティア(4、5、6、7、9、10、11、12、1、2月)では書庫に入り、外国文献未整理分 500 冊余りをリストアップした。賀川の外国語蔵書は社会学、生物学、農学関係が多く、キリスト教関係の資料は 1/3 に満たないことは一つの発見だった。
- 6) 公共福祉研究会(4、5、6、9、10、11、12月)では各界から講師を招き、講演を聴き、質疑応答をする研修会であった。一般市民の立場から企業、行政、NPO 等ボランティア団体の関係を考える場となった。今日少子高齢化、個別化、情報化、複雑化、巨大化、グローバル化が進行する中で、市民は積極的に社会に参加していくこと、関係者と連携することが求められていることが認められた。それは自由競争、奪い合い的な金融資本主義型社会ではなく、相互扶助、分かち合いによる協同組合型社会である。

3. 次年度構想

この状況は現行の社会が新しい仕組みを必要としていることを示唆する。それにはまず意識改革により市民が目覚めて自立しなければならない。次にそのような人々が健全な社会を整備する活動に参加し、互いに助け合うようになることが期待される。そのような場で賀川が唱えた協同組合運動が機能する。それには、協同組合が隣人愛を説く教会活動と連携することが有効ではないか。それにより教会は生活に結びついた活動となり基盤を強化できる。協同組合は理念が確立されて活動を着実に推進することができる。具体的には教会の有志が中核となり、行政の支援を得て地域毎に福祉協同組合を立ち上げること等が考えられる。そのようなロードマップは次年度以降煮詰めていく予定である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- 1) (上記区分④その他)日本基督教学会第61回学術大会において発表
2013年9月11日西南学院大学にて実施
- 2) (上記区分①雑誌論文)DEREK(立教大学大学院組織神学専攻論文集)第34号 14-29
頁に掲載、2014年3月1日刊行